

# 花のお江戸を歩く会

## 「あおべか物語：浦安歴史散歩」

平成26年6月1日（日）

### ＜散歩道のご案内＞

豊臣秀吉により関東移封を受けた徳川家康は江戸に入府し、大阪での豊臣氏との決戦に備えて、大阪湾周辺の地形に良く似た浦安・行徳、葛西周辺に鷹狩と称しては盛んに軍事訓練を行ったようです。

浦安が全国に知れたのは、作家・山本周五郎氏の小説「青べか物語」が発表されてからです。同氏は実際に大正15年から昭和4年の春まで、年齢23歳～26歳の時に同地で暮らし、その体験が元となって綴られているそうです。そんな、地味だが味わい深い浦安の町を歩きます。

### ＜散歩道の順路＞約8キロ、1万5千歩

東京メトロ浦安駅南口→柳通り→浦安市郷土資料館→境川→べか船（展示用）→しおかぜ緑道→左右天明弁財天→豊受神社（大銀杏・富士塚）→花蔵院→ランチタイム→境橋→東学寺→正福寺→境小橋→堀江フラワー通り→旧大塚住宅→宮前通り→清瀧神社→宝城院→大蓮寺→六人河岸→西境橋→船宿吉野家（山本周五郎ゆかり）→旧江戸川→当代島水門→船塚川跡→稲荷神社→善福寺→魚市場→浦安駅（解散）

### ＜散歩道の順路＞

#### 【浦安の歴史】

「浦安」が歴史に登場するのは、保元2年（1157年）のことだそうです。現在も市民の信仰を集めている「豊受神社」が創建されたのがその年にあたります。保元・平治といえ、ちょうど源氏と平家が覇権を争っていた平安時代末期です。

その後、天正18年（1590年）の徳川家康の関東移封に際して、葛西から浦安、行徳地域は徳川家の天領（家康の直轄地）となりました。当時は治水が充分でなく何度か洪水に襲われ、大きな被害が出ました。また、漁業権を巡って隣りの船橋村等との争いも少なくなかったようです。江戸時代には、まだ“浦安”という地名はありませんでした。

明治22年（1889年）、町村制の施行に伴い、堀江、猫実、当代嶋の3村が合併し、「浦安村（海が安らかに）」が誕生しました。当時の戸数は1,040戸、人口は5,946人でした。その頃の主な交通手段は、明治27年（1894年）に開航した川蒸気船でしたが、

明治42年（1909年）9月、町制が施行され「浦安町」がスタートしました。昭和初期の浦安の産業は、水産業を中心に栄え、境川や船塚川には“べか舟”と呼ばれる海苔採り舟がひしめき合い、漁師町として発展しました。

## ① 浦安魚市場

「浦安魚市場」の歴史は古く、昭和初期、数店で今の堀江に市を開いた。その後、浦安橋近くに移り、昭和28年に組合を結成し市場を開く。そして、昭和46年3月、「浦安魚市場総合食品センター」という名称で現在の北栄に移ってきた。

## ② 浦安市郷土資料館（学芸員のガイド予定）

漁師町時代から築き上げられてきた浦安特有の文化を再発見できる博物館で、「母なる海」が育てた浦安の自然・歴史・文化をわかりやすく展示しています。海苔すきや貝むき、ベカ舟の乗船を体験したり、舟大工の作業所で、浦安市舟大工技術保存会による製造作業が見学できます。幻の魚、「アオギス」をはじめ東京湾の魚もいます。

## ③ 境川

岸の猫実（ねこざね）村と右岸の堀江村（ともに現浦安市）の境界をなすことから名づけられた。江戸川の真水が流れることから、井戸水に塩分が含まれるこの地域では唯一の飲料水として、また、漁港として、両岸に集落が立地する要因となった。

### ◇ベカ船

行徳や浦安では、明治時代、主に海苔採りなどに使われる目的で、手づくりの木造船が登場し、これがその後「ベカ船」と呼ばれるようになった。戦後は、貝漁、魚漁、農舟（運搬用）、釣りなどに使われ、行徳の風景のひとつとなっていた。小さいながら、帆を張ることもできる。→しおかぜ緑道

## ④ 左右天明神社

明治17年10月（1884年）川島という人が建立した。この弁天様は猫実の弁天様といい、左右天命もお祀りしてある。弁天様は灰やの廊（くるわ）に災害が起こる前には、女の姿になって現れ、災害を未然に教えたり、大津波の襲来を予告したりして常にくるわの人達を救ってくれるといわれ、非常に靈驗あらたかなところから、信者が多く、特にくるわの人々は近所の守り神として崇拝している。大正6年（1917年）大津波で堂宇が流失してしまったので、くるわの人達は浄財を持ち寄って弁天様を再建した。堂宇の中には、行徳の後藤仏具師の作による弁財天が本尊として安置してある。

## ⑤ 豊受神社（大銀杏・富士塚）

豊受神社は「通称 神明様」と呼ばれ地域の人々に親しまれています。保元2年（1157年）の創建で、浦安市最古の神社です。祭神は、豊受姫大神を祀っています。敷地614坪の境内には本殿（銅板葺）、拝殿（銅板葺）、社務所（瓦葺木造）が建ち並びます。境内の神社として海神社が祀られています。永仁元年の大津波に遭い、社殿が大破し再築、続いて元禄・享保・寛政と、度重なる風水害により破損したので、嘉永3年に再建しました。大正12年に社殿を修繕し、神輿・灯籠が奉獻されました。昭和49年5月に社殿を再建し、社務所・周囲の玉垣が建築され現在に至ります。

### <大銀杏>

昔、境川の河口に流れてきた小さな銀杏の木を村のものが拾い上げ、豊受神社の境内に



植えられたものである。樹齢は350年を越す。春は緑に秋には黄色く色づく。

#### <富士塚>

豊受神社の一隅に、浅間神社を祀った小さな山があったが大正十二年(1923年)氏子たちは、その上に畑の土を盛り上げ、墨石を購入して、富士山をかたどった大きな山を築き、頂上に木花咲耶姫命(このさくやひめのみこと)を祀った石造りの浅間神社を安置し、山の中腹に中道まわりという道を造った。毎年6月30日には神前に神楽が奉納され、富士講おん人たちは井戸水で水行をとり、体を浄めたあと、真白な行衣に白い帯びを締め、手甲、脚絆に身を固め、菅笠をかぶり、金剛杖とりんを持って六根清浄と唱えながら神社に参拝し、翌7月1日富士山の山開きに出発する。盛況を極めた富士登山も昭和初期には次第にさびれ、今日ではほとんど影をひそめている。

#### ⑥ 花蔵院

本山は和歌山県根来寺。昔は海照山花蔵院神宮寺と称していた。本尊には、大目如来を安置。永仁元年8月25日(1293年)の大津波で堂宇、記録など流破し創建は確かではない。天正5年正月(1577年)当時中興の開基賢融和尚によって再興された。

#### <公訴貝獺願成の塔>

天明2年1月から約7年にわたり船橋村と三番瀬の漁場をめぐり争われ、三人の村人が犠牲になった。その三人の冥福を祈りその業績を後世に伝えと共に公訴の勝利を記念すべく村人の浄財によって建立された。→ランチ(寿司匠:750円)

#### ⑦ 東学寺

真言宗豊山派 本山は長谷寺(昔は小岩の善養寺) 永禄年間(1558年~1569年)に常誉法印の開基。

#### <薬師如来>

元亀(1570年)の頃、堀江村に与八郎という人が住んでいた。あるとき、与八郎の老母が砂浜で人形のようなものを拾い、家に持ち帰り玩具箱に入れておいた。その頃、村中に疫病が流行し、同家でも主人を除く家内の者全員が煩って難渋していた。当時、武州木根川(埼玉県)の薬師如来は靈驗あらたかなところから、与八郎は家人の病氣回復を祈願しようと参詣した。すると薬師の別当に「何も遠路はるばる来なくても、あなたの家には尊い如来様があります」といわれ急いで家に帰り探したところ、玩具箱の中に亀の上にあらせられる薬師如来を発見した。早速、この薬師如来を仏壇に安置し、香華と念仏を怠らなかつたところ、程なく家人の疫病もみな全快した。後日与八郎は、東学寺に、御利益あらたかなこの薬師如来を奉納した。

#### ⑧ 正福寺

総本山は山梨県の身延山久遠寺で、中山の法華経寺の末寺として、文禄2年(1593年)に十乘院日詠律師により開山。本尊は法華経開頭久遠の釈尊一塔両尊四菩薩。その後、明治13年1月23日の大火事で焼失してしまい大正11年11月、17世日心上人の時に再建され、この時中山法華経寺から日蓮大菩薩尊像が寄贈された。現在の本堂は平成6

年に改修。

### ＜しなび地蔵＞

昔、堀江に「しなび」という屋号の家があった。ある時しなび家の主人が江戸へ行商に行き、焼け野原で首の欠けた地蔵尊を見つけた。主人はこれを家に持ち帰り首を刻んで修復することを約束し、自分の皮膚病が治るようにと祈願したところ、病気がたちまち快復した。主人はさっそく首を刻んで地蔵尊を原形に復して懇ろに供養した。その後、このことを伝え聞いて、参詣祈願に来る者が増えたので毎月24日を縁日としたが、この日は参詣者が列をなしたほどだったという。→境小橋→堀江フラワー通り

### ⑨浦安フラワー通り

かつて浦安は小さな集落で、住民の多くは、出漁に便利な境川周辺に住み、魚貝類を採るため漁船を係留していました。境川と並行したフラワー通りは、当時浦安唯一の商店街で、通りには演芸場、映画館、日常雑貨の店、飲食店、などが並びにぎわっていました。つい最近までこの通り周辺には七～八軒の銭湯があり、住宅が密集していた事もあります。が、きれい好きな性格と、漁師仲間の情報交換の場所として重要な場所でもあったようで、入浴料を払うとその日は何度でも入れたそうです。今も400mほどのフラワー通りに、銭湯が三軒あり、境川を挟んでの一軒を入れると、現在四件の銭湯が営業中です。

### ⑩宇田川家住宅

旧宇田川家住宅は明治2年に建てられたもので、建築年代がはっきりとわかるものとしては市内最古の民家です。道路に面した店舗部分と裏の住宅部分からなり、米屋、油屋、雑貨屋、呉服屋などの商家として使われてきました。幕末から明治に至る江戸近郊の町家の形をよく伝えており、商家遺構の少ない関東では特に貴重な建物であることから、昭和57年に市の有形文化財として指定、昭和59年から公開しています。

### ⑪大塚家住宅

旧大塚家住宅は、建築構造と様式の特徴などから江戸時代末期の建築と推定されています。当時の浦安では比較的大きい家でした。この家には、屋根裏2階があって、土間と玄関の天井から上がれるようになっています。たび重なる水害に悩まされてきた先人たちが生活の知恵として考えたもので、ここに避難したり、家財道具をしまったりしていました。昭和62年、市の有形文化財に、平成14年には、県の有形文化財に指定されました。→宮前通り

### ⑫清瀧神社

清瀧神社の創立は、建久7年(1196年)です。祭神は、大綿積神を祀っています。敷地554坪の境内には本殿(銅板葺)、拝殿(銅板葺)、社務所(瓦葺木造)が建ち並びます。永仁元年の大津波に遭い、社殿が破損し再築、さらに元禄・享保・寛政年間にも同様の難に遭い、安政2年(1855年)9月に再建され、拝殿は明治29年(1896年)に建立されました。大正12年に社殿を修繕し、神輿・狛犬・灯籠が奉献されました。昭和46年に社務所と境内周囲の玉垣が建築され現在に至ります。本殿には龍・浦島太郎・竜宮城・千鳥の彫



刻が配されています。

### ⑬宝城院

本山は大和の国（奈良県）長谷寺で、昔は、清滝山観音寺宝城院と称し、武蔵国小岩村（江戸川区小岩）善養寺の末寺。本尊は不動明王（春日作）で建久7年4月（1196年）に醍醐山願行上人の開基によるものだが、天正15年7月（1587年）に中興開山覚厳法院によって再興された。

#### <庚申塔>

元文元年12月（1736年）宝城院住職賢宥法印によって建立された。江戸時代、浦安が半農半漁であったことを物語っている。

### ⑭大蓮寺

浄土宗鎮西派、大本山増上寺の末寺。行徳領内三十三観音札所めぐり最後の三十三番目がここ大蓮寺。1544年（天文13年）に、小田原の大蓮寺の行脚僧・覺譽存榮上人が浦安に参り、当地にあった勢至菩薩像の小堂に参拝し、堂宇を建立し大蓮寺と名付け開創された。鐘楼堂は、明治16年の建立で、裏門は300年以上前大名黒田藩・江戸屋敷の門を拝領したもの。現本堂は昭和2年に建立され平成8年に改修築し、三夜堂と地藏堂を建立した。薬師如来瑠璃光浄土之庭と阿弥陀如来諸菩薩来迎之庭がある。

### ⑮六人河岸

この付近から境川河口までは六人網の船着場だったので、当時、この付近を六人河岸とよんでいた。漁を終えて河口まで来ると六人網の乗り子達は、浴衣に着替え片肌脱ぎ、掛け声も勇ましく手船を繰り威勢よく川をのぼった。六人河岸に着くと獲ってきた魚を捌き明日の出漁に備え網を整備する。江戸時代にはじまったといわれている六人網が最も盛んに行われたのは明治期で、毎年暖流に乗ったイワヒヤコハダが湾内に回遊し、豊漁が続いたが、大正中期頃から魚影は極端に少なくなったので、次第に網元の数も減り、昭和初期にはまったく耐えてしまった。→境橋

### ⑯船宿吉野家（山本周五郎ゆかり）

作家・山本周五郎氏の小説「青べか物語」（昭和36年 文藝春秋社刊行）は、現在の千葉県浦安市が舞台になっています。物語では「貝と海苔と釣場で知られる根戸川の下流にある漁師町・浦粕町」として登場します。巻末の解説（文芸評論家・平野謙氏）によると、同氏は実際に大正15年から昭和4年の春まで、年齢23歳～26歳の時に同地で暮らしていたそうで、その当時の体験などが元となって綴られているそうです。そんな物語の「船宿・千本」として登場するのが、「船宿・吉野屋」です。吉野屋三代目店主・吉野長太郎は、この物語において、釣船宿の三男坊、快活な小学生の男の子「長」として度々登場、人懐っこく、茶目っ気溢れる立ち振舞いで読み手の心を和ませます。→旧江戸川→当代島水門

### ⑰船塚川跡

現在、緑道になっているこの場所は、昭和40年代後半まで「船塚」と呼ばれた川が流れていたところです。江戸時代のはじめごろに狩野浄天・田中十兵衛（当代島地区を開墾

した人物)により人工的に掘削されたものであるともいわれていますが、はっきりしたことはわかっていません。かつては、この川から農業用の水路(堰)がひかれ、田んぼへ水を運んでいました。また、漁業用の船が多く係留され、採ってきた魚介類を荷揚げする光景がよく見られました。漁へ行くときは、ここから旧江戸川に出て、海へと下っていきました。「船塚」という呼び方は、ここからきたものと思われる。

### ⑱稲荷神社

稲荷神社は、元禄2年(1689年)に武蔵野國小岩村(現江戸川区)の善養寺から移し祀って創立されました。祭神は、豊受大神を祀っています。敷地509坪の境内には本殿(瓦葺)、拝殿(銅板葺)が建ち並びます。境内神社として八幡神社が祀られています。その後社殿が破損し、明治4年4月に改築し、明治41年に再建しました。昭和20年には米軍の爆撃にあい、昭和34年に再建されました。当社は古くから疱瘡に靈験があるといわれ、嘉永年間には、社内にある小石を頂いて帰る者が市をなしたといわれています。明治8年(1875年)に浦安沖の漁場三枚洲で鯨を生け捕りにした漁師が奉納した大鯨の碑が本堂右手奥にあります。→善福寺→浦安駅(解散)